



2008年6月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2008年6月
第 6 8 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（7）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（64）（山内 薫）	5
チベット問題の平和的解決（村田忠禧）	7
酔夢亭読書日記（26）（酔夢亭）	10
見果てぬ夢を（11）（山本優子）	12
東京漢点字学習会報告（菅野良之）	15
漢文のページ	17
漢点字講習用テキスト（初級編・第9回）	20
ご報告とご案内	22
編集後記（木下和久）	23

漢点字の散歩（七）

岡田 健嗣

四 言葉に出会う（承前）

③言葉（続）



ダイヤモンド“Diamond”

木という字を一つ書きました
一本じゃかわいそうだから
と思ってもう一本ならべると
林という字になりました
淋しいという字をじっと見ていると
二本の木が
なぜ涙ぐんでいるのか
よくわかる
ほんとに愛しはじめたときにだけ
淋しさが訪れるのです

『寺山修司少女詩集』

右の詩は、本会の活動の柱の一つである『横浜通信・八二号』、この五月に発行した最新号の「編集後記に替えて」として、編集に当たって下さった会員の鈴木洋子さんが取り上げて下さったものである。『横浜通信』は、入力・校正ばかりでなく、掲載記事の選択

と編集までオリジナルに行っているもので、漢点字文の触読のトレーニングに供したいと刊行を始めたものである。現在私はこの雑誌の発行には関わっていないが、このような形で寺山の詩に触れることができたことに、実に不思議な思いを味わった。

この雑誌を発行するに当たって、編集上の幾つかの取り決め、コンセプトと言ってもよいものを作った。①発行の目的は、漢点字の読みのトレーニングにあること、②記事を選択するに当たっては、その文章の水準を遵守すること、③内容は、言語・文字・文章・文学に関するもの、④文章の長さはごく短いものであること、等である。一々に理由はある。が要するに、質の高い文章に、漢点字の触読を通して接することのできること、触読にとつて大きな弱点である早々の疲労との競走に勝ち続けながら、漢点字文の触読の力をトレーニングしようというのである。この雑誌は、本会が今の形の活動に入る以前から、会員の吉田信子さんの手によって作られて来た。創刊が何時だったか、記憶では追うことのできない年月を経て今日に至っている。そしてこの寺山修司の詩が、本会の立ち上げ当時に私の想念を占めていた思いを、また思い起こさせたのである。

寺山は、昭和一〇〜五八（一九三五〜一九八三）年、青森県生まれ、早大中退、歌人・詩人・劇作家と

いう一生を送った。しばしばテレビに出演し、その舌鋒の鋭さと独特のキャラクターは、広範囲の支持者を得ることに成功した。また同程度の怨嗟をも受けた。後にタレントとなったタモリの御箱が、この寺山の物真似であることによっても、彼がどれだけ一般に支持されていたかが分かる。そのスキヤンダラスさとスリリングさは、私たちの心の一角を離さなかったのである。とはいえない、実のところ現在でも寺山の作品のほとんどを知らない。せいぜい彼の存命中、電波を通して、恐らく虚像であろう彼の姿に接しただけであった。

七〇年代に入って私は寺山ばかりでなく、多くのスキヤンダラスな、スリリングな人たちがいることを知った。ただ寺山とは違って、電波のメディアにはほとんど登場しない。彼らは寺山の主たる顔である〈言葉〉の使い手たちであった。そうして初めて寺山修司が、言語表現を展開していることをも知ったのである。スキヤンダラスでスリリングな表現、一句一句・一字一字と向き合わなければ、読み手にはなり得ないような表現がこの世にはあることは、現在もまだ視覚障害者には紹介されていない。そのような言語経験のある視覚障害者は、実はごく限られているのである。というのは、一九九六年に本会が活動を開始するに当たって、どんな書物を漢点字訳するべきか検討した。そこで私は先の『横浜通信』のコンセプトを提案した。その具体例として詩歌の漢点

字訳を挙げた。がやがてニーズが伴わないことが明らかになって、その計画は縮小されることとなった。現代の詩歌は、ベストセラーを除いて、ほとんど漢点字訳されぬままにある。

振り分け見れば寺山が逝って四半世紀が過ぎる。この間私たちは、未だ残念ながら彼の著書を触読文字で手にすることはできていない。他の刺激的な詩人や歌人の作品にも、接することができない。読書のニーズを鑑みると、視覚障害者の言語に対する欲求、文字に対する欲求を、今一度確認する必要があるのかもしれない。勿論寺山の活躍した時代と異なっていて、一般にも言語に対する欲求は弱まっているように見える。既に「現代詩文庫」の売れ行きは極めて危機的と言う。若い詩人にスキヤンダラスさやスリリングさを求めても、世代のギャップと一蹴されるのかもしれない。

④ 文字の力

書家の石川九楊氏によれば、文字はその人の気力・体力を映すという。大ざっぱに言えば、気力・体力が充実していれば、その人の書く文字は大きく太く、ゆったりとする。反対に充実していなければ小さく細く、ちんまりして来るといふ。また大きく太くゆったりした文字を書く心がけは、気力の充実を促すであろうし、気力が充実すれば、体力も充実に向かうである

うと言っておられる。

さらに氏は、現在の日本人に、全て毛筆を使用することはできないであろうが、それでも筆記具は大事な要素であると言う。現在では西洋から渡来した筆記具が主流だが、西洋の筆記具は先が硬質であって、筆圧をかけなければ書くことができない。その中でも従来の鉛筆が最も筆圧を必要としないので、普段は鉛筆の使用を勧めたいと言われる。筆記具の選択と文字の書き方に気をつけるだけで、身体の健康と精神衛生に繋がるとすれば、そうあるべしと思わぬ訳には行かない。筆記具の中でもボールペンは最悪という。鉛筆でもシャープ・ペンシルでなく、従来の小刀で削って芯を出すものがよいと言われる。このように手で文字を書く、筆や鉛筆で、筆圧をかけずに文字を書くことを勧めておられるのである。

数学者の岡潔博士は、「キーボードの使用は修羅の道」だと言われたという。（「生活の中の仏教用語」、『文藝春秋』二〇〇八年五月号、文藝春秋社）「修羅」とは「阿修羅」の略で、インドの神の名である。『広辞苑』にはこのように紹介されている。

《阿修羅…〔仏〕 古代インドの神の一族。後にはインドラ神（帝釈天）など天上の神々に戦いを挑む悪神とされる。仏教では天竜八部衆の一として仏法の守護神とされる一方、六道の一として人間以下の存在

とされる。絶えず闘争を好み、地下や海底にすむという。アスラ。修羅。非天。無酒神。》（『広辞苑第四版・電子ブック版』岩波書店）

「六道」は、

《六道…〔仏〕衆生が善悪の業によっておもむき住む六つの迷界。すなわち、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天。六観音・六地藏・六道銭・六道の辻はこれに由来する。六趣。》（同前）

「六道」では、「修羅」は人間の下、餓鬼・畜生・地獄の上に位して、煩惱に悩み苦しめられつつ闘争を好み明け暮れする存在とされる。そして「煩惱」とは、「衆生の心身のわずらわせ悩ませる一切の妄念。貪・瞋・痴・慢・疑・見」のこととされ、他にもこれらを加えて百人を数えるとされる。

こうして見ると「修羅」とは、今生きている私たちの姿そのものであることに気づかされる。煩惱に悩みつつ闘争に終始する。このような不条理、このような矛盾にも関わらず、そこから一步も逃れられない。現在の世界、中でも経済・政治の分野を見ると、正しく「修羅場」である。キーボードから入力された電子信号は、電子マネーとなつて人工衛星と地上を行き来し、あつと言う間に地球を一周する。そのエネルギーは独占欲、征服欲、名誉欲である。そして今日、原油・穀物価格の高騰、そしてそれが他の食料品・日常生活

活用品価格の高騰を招いている。

岡博士はパソコンのキーボードをたたくことを煩悩の業と言われた。博士は一九七八年に亡くなられていった。当時はまだ現在のようにパソコンは普及してなかった。コンピュータは大学や企業の研究施設の最新設備として設置されていたのである。博士はそれを見つつ、このような見解を抱かれたのである。もし現在のパソコンの普及状況をご覧になれば、どのような感想をお持ちになったであろう？

岡博士はコンピュータの世界を「修羅の巷」と言われた。石川氏は文字を手で書くことこそ心身の充実の方法と言われた。

〈漢点字〉は〈点字〉である。〈点字〉はその構造を見ると、正しく「デジタル」の情報である。それはコンピュータの電子情報に酷似して、on/offを組み合わせた情報である。パソコンの電子情報は画面上ではフォントに変換されて、「文字」というアナログの視覚情報となる。〈点字〉の場合は、ピンディスプレイやプリント印字された〈点字〉は、確かにそのままでは点の組み合わせと見える。しかし既に本誌でも述べたように、〈点字〉はデジタルな情報として触知され、アナログな像（パターン）として認知される。カナ点字では、「、、、、、、、、、」などの点字符号は、あたかも見えない線で結ばれ

て、図像となつて、「き、け、こ、さ……め」となつて読まれるのである。

〈漢点字〉の点字符号も同様である。「」はウ冠、「」はウ冠の下に寸、「」は人偏、「」は人偏の右側に寸、「」はさんずい、「」はさんずいの右側に良、「」はさんずいの形はウ冠と、「」の形は人偏と、「」の形はさんずいと了解される。つくりの部分も、「」の形は寸と、「」の形は良と了解されて、一つの文字の要素と了解されるのである。

「点字」の符号も、触知され読み取られるプロセスで、パターン化され像となつて、認知され了解される。〈漢点字〉の符号をこのように了解できれば、〈文字〉としての機能を充分果たし得るであろう。そのためにも、触知・触読のトレーニングは欠かせない。

石川九楊氏のサジェスションに従えば、視覚障害者が心身の充実をはかりつつ〈文字〉の世界に入るには、「読み」のトレーニングとともに、手で書くことを日常とすることが肝要であるはずだ。点字であるから筆圧を云々することはできない。しかし、手で一点一点点字を打つのは、〈漢点字〉をパターンとして了解するのに大きな力となるに違いない。

(続く)

点字から識字までの距離(六四)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

漢字批判(上)

日本語の文字はかなと漢字によって構成されていることが当たり前であると思われるが、その漢字を廃止したり制限すべきだという主張も繰り返し提唱されてきた。古くは新井白石がその著書『西洋紀聞』(一七一五年頃)の中でアルファベットと漢字について次のように言及している。アルファベットは「其字母、僅に二十余字、一切の音を貫けり。文省き、義広くして、其妙天下に遺音なし、其説に、漢の文字万有余、強識の人にあらざしては、暗記すべからず。しかれども、猶声ありて、字なきあり。さらばまた多しといへども尽さざる所あり。徒に其心力を費すのみといふ。」要するに、アルファベットは二十数文字で一切の言葉を表現できるが、数が万にも及ぶ漢字を覚えるには相当記憶力の良い人であつても精神的に負担が多いと述べている。

明治維新以降、日本語近代化の一環として漢字廃止を唱えたのは郵便の父とも言われる前島密だった。

「御国においても西洋諸国のごとく音符号(仮名字)を用いて教育を布かれ漢字は用いられず終には日常公

私の文に漢字の用を御廃止相成候様にと奉存候」という「漢字御廃止之儀」という建白書を一八六六年、徳川慶喜に提出している。その前書きの中で前島密は「日本の教育は漢字をおぼえることに迫られているため、一般国民は知識から遠ざけられているばかりでなく、漢字を学ぶ者は中国崇拜に走つて愛国心をわすれ、また物理、技術関係の知識をいやしむために西洋の文化からとりのこされてしまった。」と述べている。そして、明治六年(一八七三)に独力で「まいにちひらがなしんぶん」というカナばかりの新聞を発行した。しかし「まいにちひらがなしんぶん」は売れゆきが悪く、まもなく廃刊となった。

同じ頃、福沢諭吉は「文字乃教」と題する著書(明治六年・一八七三年)の中で「日本に仮名の文字ありながら漢字を交え用いるは甚だ不都合なれども往古よりの仕来りにして全国日用の書に皆漢字を用るの風と為りたれば今俄にこれを廃せんとするも亦不都合なり。(中略)今より次第に漢字を廃するの用意専一なる可し。其用意とは文章を書くに、むつかしき漢字をば成る丈け用いざるよう心掛ることなり」と漢字制限を主張した。福沢諭吉はこの本の中で、小学校(当時は四年制)の漢字として八〇四字を提案した。(当時の小学校では三千字、四千字を教えていたという)

その十年後の明治十六年(一八八三)には、国語辞典『言海』の編纂者として有名な大槻文彦等によつて

「かなのかい」ができた。この会の規則第一条には、会の目的として「我が国の学問の道を容易くせんが為めに言葉は和漢古今諸外国の別無く成るべく世の人の耳に入り易きものを採り取り専ら仮名のみを用いて文章を記する方法を世に広めんとするにあり」とある。五年後には「万人もの会員を擁したが、この会はまもなく姿を消してしまった。

それ以降、漢字の廃止や制限を主張する運動は（一）新国字論（二）ローマ字論（三）カナモジ論の大きく三つの流れで展開されることになる。

新国字論というのは新たに文字や書体を考案した案で、速記文字を改良したもの、カタカナを改良して横書きにしたもの、ヒラガナを改良したもの、カタカナとヒラガナをとりまぜたもの、漢字の表意性をとり入れたもの、カタカナにローマ字のような書体をとり入れたもの等々、さまざまなのが提唱された。しかしそのどれも現実に使われることはなかった。

ローマ字は古くは一六世紀、日本に渡来したイタリヤやポルトガルの宣教師たちによって書かれていたが、明治一八年（一八八五年）「羅馬字会」が結成され、明治四二年（一九〇九年）には物理学者の田中館愛橘等によって「日本のローマ字社」が設立された。

田中館の高弟であった田丸卓郎が同社より一九一四年（大正三年）に出版した『ローマ字国字論』には、「語は人の思想を表す為の道具で、字はその道具を写

すだけのものである。」「思想知識を中身とすれば、語はそれを入れてある重箱のようなもの、字はその重箱を包む風呂敷位なものである。我々が漢字の読み書きや使い分けに苦労しているのは、風呂敷の詮索にばかり暇どって、肝心な中身をお留守にしているようなもので、随分馬鹿気た話である。」と、アルファベツトを使用している外国と比べて、漢字を使用することでいかに国民が損を被っているかを縷々述べている。そして、最後の要点では「日用文字としてローマ字を使うことによって、初めて漢字から来る損を救い、教育をもつと有効に且つ経済的にして、吾々が世界における烈しい競争に加わって行くことが出来る。ローマ字を使うことは日本語の世界的発展を助け、その他一般生活に、軍事に、商業に、印刷に、外交に、直接間接に要する利益を与える」とまで述べている。

三つ目のカナモジ論にはひらがな論とカタカナ論があった。先の前島密の「まいにちひらがなしんぶん」の後、国文学者の物集高見はひらがな書きの辞書『ことばのはやし』を明治二一年（一八八八年）に編んでいるが一般の関心は盛り上がらなかった。カナモジ運動もはじめの頃はほとんどがひらがな運動であった。しかしひらがなは漢字の草書に由来するため一字一字の独立性が強すぎ、語形を作る要素がとばしかなかった。あまり広まることなしに姿を消したという。

一方カタカナ論は明治一九年（一八八六年）政治家

であった末松謙澄が『日本文章論』で、カタカナの横書き採用とその字体の開発を提案したが伝統勢力からの反発もあって立ち消えになった。その後大正年間に住友銀行の理事だった山下芳太郎は末松の案を發展させ、左横書きのカタカナに日本語を統一する案を提唱し、大正九年（一九二〇年）「仮名文字協会」を設立した。そして二年後には機関紙「カナノヒカリ」を創刊した。「カナノヒカリ」は現在も財団法人「カナモジカイ」によって発行されており、最新刊は二〇〇六年アキ号で通巻九三三号となっている。カナモジカイの方針は以下の五点にまとめられている。「一、カタカナを横書きにすること。二、分かち書きを採用すること。三、カナヅカイは、表音式とすること。四、字体は、横はばをせまくして密着させること。五、それぞれの文字は、ローマ字のように、上に出る線のあるものや下に出る線のあるものなど、特色を与え、それによって、それぞれの語に語形を与えること。」このうち一から三までは点字と共通であり、四と五はカタカナ書体（フォント）のことで、様々なカタカナ書体が考案されている。

（今回の記事は「カナモジカイ」のホームページ、および紀田順一郎著『日本語大博物館』ジャストシステム、一九九四などを参考にしました）

チベット問題の平和的解決

横浜国立大学 村田忠禧



左は、横浜国立大学教育人間科学部教授・村田忠禧先生からいただいた、「日中友好協会」の機関誌『日本と中国』に、「チベット問題」についてご発言なされたものです。報道からは中々得られない情報も多く、私たちにとつて、新鮮なご考察です。去る五月一二日に世界を震撼させた四川省大地震に触れて、以下のようなメールを頂戴しました。

《中国四川大地震に世界中が釘付けになっており、私もそうです。／いま考えていることは、震災からの復興に日本としてどのような支援ができるか、ということ。／日本は地震大国ですので、いろいろ日本の経験、知識、技術が役立つと思うので、ぜひこの機会に積極的な支援策を出すことが、中国にとって大助かりですし、またそれによって日本の評価も高くなり、「戦略的互惠関係」というのが単なるスローガンにとどまらないものになると思っています。／横浜国立大学にも四川省からの留学生がおり、彼女の実家および工場は崩壊したとのこと。ですから他人事ではありえません。／チベット問題について、最近『日本と中

『国』という社団法人日中友好協会の新聞に書いた文章があります。／今後、平和的に解決する可能性は十分ある、というのが私の「読み」です。》

衆知の通り先生は、学術・文化の面で、日中関係の推進にご尽力下さっております。〈漢点字〉も折々にご紹介下さいます。ご精読下さい（岡田）。



5月4日、深圳で中国政府関係部門とダライ・ラマ特使との非公式協議が行われた。6月には公式協議が行われる、とダライ・ラマ側は発表している。

この非公式協議に先立つ3月28日にダライ・ラマが発した中国人向けメッセージにおいて、三人の中国の最高指導者に言及していることは注目に値する。

一人は毛沢東である。1951年から1957年までに毛沢東は少なくとも13通の書簡もしくは電文をダライ・ラマ宛に発している。ダライ・ラマからも同数以上の書簡や電文が毛沢東宛に発せられていると推測できるが、私がこれまで読むことができたのは1951年10月24日の公式電文のみ。歴史の真相を明らかにするため、すべて公開されることが望まれる。毛沢東の1956年8月18日の書簡では「この手紙をあなたは読めたでしょうか。草書の字がまだ多く、すぐには

改められませんが、前回よりは少なくなりました」と中国語を学び始めたばかりのダライ・ラマへの配慮を示し、チベットの若き指導者の成長を温かく見守る姿勢がにじみ出ている。ダライ・ラマは3月28日のメッセージにおいて、かつて自分が全人代常務委副委員長として北京に滞在した1954〜55年当時のことを「毛主席からはいろいろな問題について多くの教えをいただき、チベットの将来について彼本人から多くの承諾をいただきました。それらの承諾に励まされ、また当時の中国の革命指導者たちの決意と情熱に鼓舞されて、私は期待と信念を胸にしてチベットに戻り」、「中華人民共和国という家族の枠組みのなかで名実相伴った民族区域自治を実現するために努力しました」と回想している。

毛沢東はダライ・ラマたちチベットの上層支配層の開明的な対応に期待を寄せていたが、必ずしも歴史はそのようには進まなかった。彼が59年3月にチベットを脱出したあと、チベットでは民主改革が実施され、封建農奴制が撤廃され、チベットは新しい社会となった。チベット自治区は1965年8月に成立するが、自治区準備委员会主任委員であった彼はこれに関与していない。しかも翌年から文化大革命の嵐がチベットのみならず、中国全土に吹き荒れた。

ダライ・ラマのメッセージで二番目に登場するのは鄧小平である。1979年3月12日に鄧小平が「チベットの独立という問題を除くならば、すべての問題は交渉可能である」と特使として派遣された兄に語ったことを明らかにしている。この時の会見は『鄧小平年譜』に断片的に紹介されており、鄧小平は「ダライ・ラマが帰って来るのを歓迎するし、より多くの人が見学に来るのを歓迎する。もしも帰国したくなく、ただ帰って見るだけ、というのでも歓迎する。帰ったあとまた出て行ってもよい。もし彼らが帰国するなら、政治的に適切な配置を行う。往來は自由である、ということを保証する」と述べている。「政治的に適切な配置」とはかつてダライ・ラマが全人代常務委員会副委員長であったことを念頭に入れての発言であろう。ダライ・ラマは「我々はすでに中華人民共和国憲法の枠組みの範囲内でチベット問題を解決する道を模索する方法を公式化していましたので、これをあらたな好機と捉え」、中華人民共和国の当局者と何度も会った。2002年に新たな交渉が開始されて以来、すでに6回に渡る交渉を行なって来たが、実際には何ら進展がなかった、と述べている。

三人目の指導者は胡錦濤である。ダライ・ラマは「調和ある社会（和諧社会）」の建設を掲げる「胡錦

濤国家主席の政策を高く評価し、支持」していると表明する。自分は「中華人民共和国という大家族の一員として自分をみなす準備ができている者」であり、胡錦濤が今年3月6日の全人代チベット代表団との交流において「チベットの安定は全国の安定と結びついている」と発言したことに、チベット問題解決への期待感を持ったことを表明する。しかし一方では今自分は「分離主義者」、チベット各地のデモや抗議行動の指揮者であるという非難を受けている、とその不当性を訴え、対話を促進し、寛容と理解の基礎の上でチベット問題を解決することに努力するよう訴えている。

4月6日のチベット人向けメッセージにおいても「チベットの将来について、中華人民共和国という枠組み内で解決を図ることを決意しています」と表明し、さらに4月24日の全世界の中国人信者向けメッセージでも「チベット独立を求めるものではなく、われわれが求めるものはチベットの仏教文化、言語文字、民族特性及びすべてのチベット人民が享有する実質的意義での自治」であることを重ねて表明している。

こう見てくると、ダライ・ラマの3月28日、4月6日、4月24日のいずれのメッセージにおいても中国政府と中国共産党への非難が随所に見られることは事実だが、本質的なことは対話によるチベット問題の平和

的解決を求めていることにある。中国政府当局が対話再開に応じたのも、それを見取っているからであろう。したがって双方が努力すれば対話が実を結ぶ可能性は十分にあり得る。ただし現時点では双方に根強い不信感が存在しており、必ずしも前途を楽観視できない。

5月4日の非公式協議において、中国側は分裂活動の停止、暴力活動とその煽動の停止、北京オリンピックの妨害活動の停止という三条件を挙げ、その実現を次の協議のための条件としている。興味深いことはダライ・ラマが5月15日からドイツ、イギリスへの訪問活動をしていることである。これまでダライ・ラマはオリンピックの開催を誇りに思い、楽しみにしている、と表明している。北京オリンピック反対運動が吹き荒れたヨーロッパで、彼がどのような役割を演ずるのだろうか。その結果次第で6月開催といわれる次の正式協議の日程も確定するのだろうか。もしダライ・ラマが平和的解決のために努力していることが明白になったら、中国側も積極的に応えるべきであり、その具体的対応としてオリンピック開会式に彼を招待することを提案したい。ついでに青蔵鉄道に乗ってチベット自治区を自分の目で見てもらえばいい。1971年、名古屋で開催された世界卓球選手権大会に参加したア

メリカ選手代表団を毛沢東の決断で中国に招いたことが、アメリカと中国との歴史的和解の突破口になったのと同様、「一つの世界、一つの夢」をスローガンとする北京オリンピックがチベット問題の平和的解決の突破口になれないことがあるうか。双方は知恵と勇氣を持つべきである。(2008年5月18日執筆)

酔夢亭読書日記(第26回)

酔夢亭



某月某日。

ときの権力に弱く、横並びで自主独立自尊の念のない人間を酔夢亭風に言えば、田子作と名付けるわけが別田舎もの或いは地方出身者を差別罵倒しているわけではありません。自尊とはソンを承知で痩せ我慢したり、一寸の身であっても五分の魂があるんだ、という心意気みたいなものですが、そんなスカツとする人格に最近とんと遭遇しないために、ストレスがたまり、挙句便秘症に陥り、うんうん呻っても何ものをも体外排出できず、産みの苦しみとはかくなるものか、とか妙に感慨深くなったりする朝もあります。鬼畜米英が一夜明けると「拝啓マツカーサー様」ですものね。

かくの如く節操なき国民氣質を有してはいるもの、黒船の出現により自閉の平安が無理無体にこじ開けられた日本が、他のアジアやラテンアメリカのように西欧の植民地にならなかつたのはなぜでしょうか。

「日本近代技術の形成」(中岡哲郎 朝日新聞社)。

ここに介在してくるのが、自主独立自尊の念を持った人々、サムライや職人や頭と手と心意気でなんとかしなけりや国が減じる、みたいな危機意識をもった人々がウンカのように、梁山泊の豪傑たちのように、八犬伝の八犬士の如く、次々と登場したわけです。

幕末維新の物語は血湧き肉踊るわけですが、平成の現代もグローバルの波に翻弄されて、ペリーの黒船以上に危機的状况にもみえないことはないと思いますのに、あの澁刺とした御一新の頃のような若き改革者がないにゆえに出現してこないのか、ちよつと不思議であります。

平成の日本人はなんだか軟弱ひ弱になって、3丁目の夕日、みたいな、屁のつっぱりにもならない映画に感動して、昭和30年前後のノスタルジアに耽っているようですが、その頃は高度成長が始まる頃の貧しい日本であり、差別用語が平気で飛び交い、タン壺が町のそこかしこにおいてあるような、江戸川乱歩的なぼんぼん船長的な、かちどき橋が八の字に開くような時代

だったのでは？ 吉本隆明いうところの大衆の原像が虚像でなく、実像として幻想できる時代だったのかもしれません。まさに、ドブ板の臭うような日本、糸ミミズが棲息し、夕方になるとコウモリが飛び交うような下町の風景。しかし、それはそれで、昔の光景に過ぎないと思う。

そのかつてのまぼろし探偵や、貸本屋の世界を懐かしんで、眼をうるうるさせているようでは戦争を知らない子供達として、かつてのヒッピーとして、全共闘として、アバンギャルドとして、レボリュウシヨナリストとして、詩人として、あまりに退嬰的で尾羽うち枯らし過ぎじゃないでしょうか。

「はてな、明治維新後、江戸の町奉行所の連中はどうしたのかしら？」山田風太郎はそんな疑問を感じ、「警視庁草紙」を書きました。警視庁ができたのは明治の初年代で、この新体制の警視庁という役所とお馴染み江戸時代の町奉行所とどういう関わりがあったのか、どういふ事務引き継ぎがあったのか、などという下世話な疑問も出てきたりします。「江戸南北町奉行と御一新後の事務引き継ぎ」(酔夢亭阿呆 羽化出版)。阿呆によれば、江戸時代(慶応)から明治時代へと変わったときの事務引き継ぎというものはまったくなく、なし崩し的にまあまあなんとかなんとなく引

き継がれていくみたいない阿吽の呼吸みたいなもので、これは今日の役所の事務引き継ぎに応用されていて、つまり役人における無責任体制の永遠性、という論旨になります。

江戸の首切り役人が維新の後も刑務所で、首切りの仕事をしていた、死刑の執行方法が斬首から段々絞首刑へと移行していくことに職業的危機感を感じていたようですが、はなはだ人間的世俗的であります。首切り役人といえば、「子連れ狼」の挿一刀をすぐ思い起こしますが、警視庁巡查のなり手には、旧幕府や各藩のお庭番、新撰組OBなど多士済々であった様子。日本の役人根性と田子作性を研究するには、維新と太平洋戦争敗戦後、そして現在を結びつけて考察していけば、ひとつの日本人論、官僚、役人論を展開できるかもしれません。

ところで、幕末の志士たちの危機意識を駆り立てさせ、ナシヨナリズムに走らせたのは、なんといつても西洋の近代技術の圧倒的優位性でした。その優位性を典型的に示したのが、大砲と軍艦であったわけです。大砲と軍艦に示された西洋近代技術の脅威との闘いが幕末明治における近代日本の進路を決定づけたともいえます。

以下次号

見果てぬ夢を（十一）

山本優子



十二 恵子（承前）

増江は、恵子の身体を洗ってやるうとして、六歳にしてはあまりにも小さい身体があざだらけであることに涙をこぼした。お灸の跡がいくつもある。言葉を、十分しゃべれないというより、語りかけても返事をしない。時々金切り声を上げる。全盲であるのに加えて耳もよく聞こえていないように見えた。食事を与える時、手づかみでがつがつと食べ、茶碗をいつまでもさわっていた。

夜中、恵子は激しく咳きこみ始めた。咳は、断続的に続き、明け方息も止まるかと思われるほど、ひどくなった。増江は眠らないで恵子の背中をさすったり、語りかけたりしていたし、孝之進も咳に効くと思われる指圧を何回も行った。

夜が明けると、恵子はぐったりと眠り込んだ。

恵子の咳は毎晩続いた。

一週間後、恵子がやっとなつかの間の静かな眠りに入った時、孝之進は、増江につぶやいた。

「恵子をうちの子にするのは、わたしたちには無理だ。何より、お前が倒れてしまう。孤児院をさがさう」

即座に、増江が怒りのこもった声をぶつけてきた。

「コウさん、あなただけ祈って今の言葉を言った？ 恵子ちゃんは神様がこの地上でわたしたちに預けてくださった子供じゃないの！」

孝之進は、頭をたれた。

「すまん。わたしは、自分の思いで言ってしまう。われわれに力はないが、主が恵子を育ててくださることを信じて祈らなくてはいけなかったのだ。恵子は愛のないわたし自身に気づかせてくれた」

孝之進と増江は、ひざまずいて祈り始めた。増江は号泣しながら、祈った。

「人間的な思いでは恵子を愛しきれません。あなたの愛をください。その愛で、恵子を愛せるように……」

孝之進は、祈り続ける増江の手を握って祈りながら、涙をこぼしていた。恵子にも、訓盲院の院生一人一人にも、主の愛に基づいた教育を施さなくてはすべ

てが虚しいという想いはつきり持った日だった。祈り終わってから、増江はすつきりした声で言った。

「さあ、今日も一日働きますよ！」

孝之進は、自分でも驚くようなことをふつと言った。

「わたしがいなくなっても、お前なら恵子のことも訓盲院のことも、しっかり支えてくれるなあ」

増江は、ぴしやりと言った。

「コウさんが先に天国に行っても、わたしが先でも、訓盲院を支える人は主が送ってくださるんじゃないですか？」

孝之進は、はっとした。

「そうだ。訓盲院は、わたしたちのものではないのだからな。一生懸命になるにつれ、自分の栄光を求め誘惑に負けそうになっていたかもしれない」

孝之進は、主の愛と訓戒を実践できる後継者準備の必要を思った。後に訓盲院に迎えられた教師今関秀雄（いまぜき ひでお）は、孝之進の遺志に応えるかのように、多聞教会で求道し、キリスト者となり、聖書の精神を土台に訓盲院を建て直していくことになったが、その時の孝之進には、そのような将来を想像できなかった。

恵子が左近允家に引き取られてから、約一ヶ月たった。

その一ヶ月の間に恵子は、大きく変化していった。

血色がよくなり、朝方咳きこむが、その合間によく眠るようになった。乳幼児期にさせてもらえなかつた遊びを今からでも楽しませようと、増江は教会員などに頼み古いおもちゃを譲ってもらった。恵子は、人形を抱いたり、積み木を積んだりして遊ぶようになった。多忙極まる毎日だったが、増江は精一杯恵子といっしょに過ごした。そのうちに、人を払うような動作で突っばねていた恵子が、増江にだけは、少しの間じっと抱かれているようになった。叫び声をあげることも少なくなり、笑顔さえ見せるようになった。増江は廁で用を足すことや茶碗を持ち箸で食べることも根気強く教えた。恵子にはかなり難しいことだった。孝之進は、つくづく増江にはかなわないと思った。

進藤かつは、ブラウン夫人から送金されてきた養育費を後で孝之進たちに届けると約束したはずだったが、ぷつぷつり音信を絶ってしまった。案の定と思いがらも、恵子がかつの子供である間は、連絡を取り役

所への手続きもしなくてはならない。ところが、進藤家をいつ訪ねてもかつはいない。夫が出てくると、酒の臭いをさせながら、

「恵子はあるたさんらが引き取りはったんやろ。わしはお宅が万事あんばいやつてくれはるとしか聞いてへん」

と、とりあおうとしない。それでもとうとう渡辺夫人はかつが家に入ろうとしているのを見つけた。夫人は、かつを捕まえ、恵子の身の振り方を話し合わなくてはならないからと引きずるように訓盲院に連れてきた。もう十二月に入っていた。

孝之進の前に来たかつは、けんもほろろに言った。

「ブラウンさんは、養育費を月四円送る言うてたくせに全然音沙汰なしなんですわ。捨て子ですわな」

孝之進は、これ以上養育費のことでかつと問答しても無駄だと思った。話題を恵子の籍のことに移すと、かつは恵子の族籍はもともとはつきりしなかつたのにブラウン夫人がかつの遠縁だと嘘をつき養女にさせられたのだと言った。先生たちの方で孤児として取り扱われるなり、市役所に引き渡すなり、お好きなようにしてくださいと言いい、仕事があるからと走るように帰っていった。

(つづく)

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

20年度 第1回（第13回）報告

- 1 日時 平成20年4月19日（土）18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
- 3 出席者（省略）

4 使用教材

「漢点字講習用テキスト 初級編

第二回（全十回）「点字編、墨字編

レーズライター…味、体、字、宗、宝、安、案、穴

5 学習会内容

(1) 前回の復習 テキスト第二回、

3 複合文字（1）

「林^木」…「木」を2つ並べた形。木には生命力があり、木霊・木魂（こだま）に使われ、樹木の精霊ややまびこの意味がある。

「森^木」…「木」に数字の「3」をつけたもの。他に「3」が付く字は轟がある。

「材^木」…才と木で構成。偏と旁が逆になった逆転文字の一種。

「相^木」…木と目で構成、目で木を見つめるという

会意文字。人名、地名にも使う

「想^木」…木と心で構成、相の目の部分を省いた。

「果^木」…田と木で構成、この場合の田は木に実が沢山なっている姿を意味する。

「課^木」…言偏に田で構成、果の木の部分を省いた。課長などに用いられる。

「休^木」…人偏と木で構成。音読みのクの使われ方は宿題。

「保^木」…人偏と口で構成、木を省いた。「呆」の大事に育てる（くるむ）という意味からきている。

「来^木」…旧字は麦の穂が実った形を表す。

(2) 今回の学習内容 テキスト第二回、漢数字及び第一基本文字を部首とした文字

・未^木（1・2・6+4）を部首として含む文字。

「味^木」口偏+4。音読みのミは呉音、ビは漢音。ビの使われ方は、気味（キビで、キミの転じたもの）。熟語の含味は深く味わう意味で、吟味は趣を味わう、物事をよく調べるといふ意味になる。

・本^木（1・2・6+6）を部首として服務文字。

「体^木」人（1・3）偏+6。音読みのタイは呉音、テイは漢音。テイの使われ方は、有体（ありてい）、体裁（テイサイ）、旅体（タビテイ）など。元の字は體（がいこつ）で、骨組みからきている。

・ウ冠 (1・4) を部首として含む文字。

「字」 ウ冠十子 (2・4・6)。音読みのジは呉音。ウ冠は屋根を表し、子供の名前をつけるためにみたまやへ入るという意味。訓読みのあざなは幼少の頃の通称。

「宗」 ウ冠十示 (1・2・3・4)。三脚の上に供物を載せる台、祭壇に貢物を捧げるということを表す。音読みのシユウは慣用音、ソウは漢音。ソウは宗家(ソウケ)に使われ、皇帝の呼称となった。

「宝」 ウ冠十玉 (1・2・3・4・6)。音読みホウは漢・呉音。

・安 (1・4 + 1・3・4・6) とそれを含む文字
「安」 ウ冠十女 (1・3・4・6)。元は女性が嫁ぐ時に最初にみたまやへお参りしたことからきている。音読みのアンは漢・呉音。漢文訓読語は安んぞ(いづくーんぞ)と読む。

「案」 女十木 (1・2・6) でウ冠を省略。元は机を意味した。女性が書く手紙の末尾の案下(あんげ)とは机の下で書いたという謙遜表現。他に案山子(かかし)の例がある。音読みのアンは漢・呉音。

・穴 (1・4 + 1・2・5) とそれを冠とする文字

「穴」 ウ冠十八 (1・2・5)。音読みのケツは漢・呉音。穴冠として用いる。

20年度 第2回(第14回) 報告

- 1 日時 平成20年5月17日(土) 18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
- 3 出席者(省略)

4 使用教材

「漢点字講習用テキスト 初級編

第二回(全十回) 一点字編、墨字編

レーズライター…協、直、朝、世、葉、古、苦、枯

5 学習会内容

(1) 前回の復習 テキスト第二回、

3 複合文字(1)

「味」。「体」。「字」。「宗」…訓読みの「むね」は主に人名に多く使われる。「むね」は他に旨、胸、棟。「宝」。「安」。「案」…安に木であるが、安のウ冠を省略し、女(1・3・4・6、フ)十木(1・2・6、キ)で構成され、元々は机で、波及した字。

「穴」…ウ冠(1・4、ウ)十八(1・2・5)で構成。元は黄土地帯の住宅で、土を掘り下げてさらに横穴を作り、住居としたことが語源。テキストにある「経穴」とは、漢方に使われる「つぼ」をいう。

(21ページへ続く)

漢文のペーシ

長恨歌（3） 盛唐 白居易

後宮佳麗三千人
 三千寵愛在一身
 金屋粧成嬌侍夜
 玉樓宴罷醉和春
 姊妹弟兄皆列土
 可憐光彩下門戶
 遂令天下父母心
 不重生男重生女

前回到続く部分です。

楊貴妃の美しい女官たちがいる中で、
 は繁栄した。その愛を一身に受け、
 たは、男子を生むより女子を世間で
 方がよいと思うようになった。

後宮の佳麗三千人

三千の寵愛一身に在り

金屋粧成りて嬌として夜に侍し

玉樓宴罷んで酔うて春に和す

姊妹弟兄皆土を列ぬ

可憐べし光彩の門戸に生ずるを

遂に天下の父母の心をして

男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ

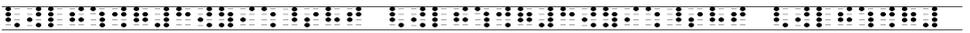
列レ土ニ諸侯となり、
 領土を連ねる。従兄の
 楊国忠は宰相となり、
 三人の姉は諸侯の夫人
 となった。

可レ憐ニ感動を表す言

葉で、気の毒なことだ
 の意味にも使われるが、
 ここでは、ああうらや
 ましいことだの意。



華清宮



長恨歌、ちょうごんか

後宮ノ佳麗三千人

三千ノ寵愛在リ一身ニ

金屋粧成リテ嬌トシテ侍シ夜

ニ

玉樓宴罷ンデ酔ウテ和ス春

ニ

姉妹弟兄皆列ヌ土ヲ

可シ憐ム光彩ノ生ズルヲ門

戸ニ

遂ニ令ム天下ノ父母ノ心ヲシ

テ

不重ンゼ生ムヲ男ヲ重

ンゼ生ムヲ女ヲ

参照図書：遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』（旺文社）



漢点字講習用テキスト

初級編 第九回

3 複合文字 (1)

3. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (4)

(「門構え」の続き)

(39) 問  モン と - う とい

「門  構え」の下に「口 」を入れた形の文字です。ものを問う、尋ねる、またその問い、さらに人を訪れるという意味を表します。漢点字では、「 (門構え)」と「 (口)」で表します。

「問題」「問答」「問責」「質問」「設問」「訪問」「尋問」「問屋」「問わず語り」

(40) 開  カイ ひら - く あ - く
あけ - る

「門  構え」の下に、二本の縦線と横線が、鳥居の形に組み合わせられて置かれた文字です。門のかんぬきを外した形と言われます。閉ざされていた戸が開かれる、新しい耕地が開かれる、新しい技術や市場が開かれる、何かを目指して始めるという意味を表します。漢点字では、「 (門構え)」と、「」で表します。「」は、「甘  」のことで、十が二つ、開いた形を表しています。

「開門」「開会」「開発」「開始」「全開」「お開き」

(41) 閉  ヘイ と - じる と - ざす
し - める し - まる

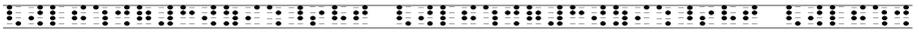
「門  構え」の下に、「才 」を置いた文字です。「才」は、入り口をびたりと閉じた形を表しています。戸口を閉ざしたり、催しや会合を閉じることを意味しています。漢点字では、「 (門構え)」と、「 (才)」で表します。(40)の「開」と対にして、「」は開き、「」は閉じとご理解下さい。

「閉門」「閉会」「閉鎖」「密閉」「閉め出し」

※ 「口構え」の文字四つ。

(42) 回  カイ エ まわ - る まわ - す
めぐ - る めぐ - らす

「口     え」の中に「口 」が部首として入った形の文字です。水



の渦を象った文字と言われます。ぐるりと回る、一回回って元へ戻るという意味を表します。またそこから、何回、何度という、動きや動作の回数の単位にも用いられます。“回教”とは、イスラム教のことです。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎 (口構え)」と「𠄎𠄎 (口)」で表されます。

「回数」「回転」「回覧」「回復」「巡回」「九回のウラ」「回り道」「回り灯籠」「水回り」

(43) 国 𠄎𠄎𠄎 コク くに

「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎え」の中に「玉 𠄎𠄎」を部首として入れた形の文字です。周囲を区切った領域を表します。昔は一つの地方、統治された領域を表していました。現在では、主権を持った国家を意味します。口語的には出身地や居住地を言うこともあります。漢点字では、「𠄎𠄎 (口構え)」と「𠄎𠄎 (玉)」で表されます。

「国家」「国歌」「国会」「日本国」「米国」「英国」「中国」「お国訛り」「国破れて山河在り」

・「固」とそれを含む文字。

(44) 固 𠄎𠄎𠄎 コク かた - い
かた - まる かた - める

「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎え」の中に「古 𠄎𠄎𠄎」が部首として入った形の文字です。「古 𠄎𠄎𠄎」は、古く固い頭蓋骨を象った文字で、それを四角い枠の中に押し込めた形です。“かたい”、“動かない”、“融通が利かない”といった意味があります。漢点字では、「𠄎𠄎 (口構え)」に「𠄎𠄎 (古)」で表されます。

「固体」「固辞」「固有名詞」「頑固一徹」「地固め」「足固め」

(45) 個 𠄎𠄎𠄎 コク

「人 𠄎𠄎」に「固 𠄎𠄎𠄎」の形の文字です。一つ一つ分かれているもの、形が定まって数えられるもの、また、一人一人の人という意味があります。漢点字では、「𠄎𠄎 (人偏)」に「𠄎𠄎 (固)」で表されます。

「個人」「個性」「一個、二個、三個」

※ 「元 𠄎𠄎𠄎」の儿 (ひとあし) の付いた文字。

(46) 兄 𠄎𠄎𠄎 ケイ キョウ エ あに

「𠄎𠄎」の下に「元 𠄎𠄎𠄎の儿 (ひとあし)」を置いた形の文字です。頭の大きな人を意味しています。同じ親から生まれた年上の男子を言います。また、相手の敬称としても用いられます。漢点字では、「𠄎𠄎 (口)」と「𠄎𠄎 (儿)」で表されます。

「兄弟」「大兄」「貴兄」「兄貴」

(16ページから)

(2) 今回の学習内容 テキスト第二回、漢数字及び第一基本文字を部首とした文字

・穴^{●●●●}(1・4) 冠を部首として含む文字。

19 「究^{●●●●}」穴冠十九(2・4)で構成。体を曲げてかがめた形を象った文字(常用字解)。音読みのキュウは漢音、クは呉音。クの使用方は、究竟(くきょう)。真理の究極、きわめてすぐれていること、という意味)。究竟覚(くきょうかく。悟りの極致、という意味)。

・完^{●●●●}(1・4と2・5)とそれを含む文字。

20 「完^{●●●●}」ウ(1・3)冠と元(2・5)で構成。戦を終え、みたまやへお参りする(常用字解)。一つのことが終わったという意味。音読みのカンは漢音。

21 「院^{●●●●}」こざと偏(1・5・6)と完(2・5)で構成。こざと偏は神様との関係が深い。元は他の字が使われ、音読みはカン↓エン(漢音)↓イン(慣用音)と変化。エンのつく文字は書院(しよえん、しよいんに同じ)がある。

・ワ冠(2・5)を部首として含む文字。

22 「軍^{●●●●}」ワ冠十車(1・3・4・5・6)で構成。軍の大將が乗る車とワ冠は軍旗を意味する(常用字解)。音読みのグンは呉音、クンは漢音。訓読みにくさがある。軍のつく文字として「軍鶏(しやも)」がある。

・十^{●●●}(2・4・5)を部首として含む文字。

23 「計^{●●●}」言偏(1・2・4)と十で構成。比較的新しい文字。十は占いからきたという白川先生説がある。音読みのケイは漢・呉音。訓読みのはかるには、他に「凶る」「量る」「測る」「諮る」「謀る」などあり、それぞれ意味が異なる。

24 「早^{●●●}」日(2・3・6)と十で構成。常用字解ではいわゆる「早い」の意味ではなく、未明とか薄暗い早朝を意味している。「十」は草の葉を表す意味がある。音読みのソウは漢・呉音、サは慣用音。「早稲(わせ)」に対する「おくて」には晩稲(他に晩生、奥手、億手、晩熟)がある。ちなみに15の「草」は「早」からきたものである。

25 「協^{●●●}」十と力(1・3・4)で構成。人が集まって何かを行う。「力^{●●}」は農具の鋤を意味し、人々が寄り集まって田を耕したことからきている(白川先生説)。音読みのキョウは漢音。「協同」と同義に「共同」がある。

26 「直^{●●●}」十と目(1・2・3・4・5・6)で構成。目の上に飾りを付け、まじないをして、物事を正す(常用字解)。音読みのチョクは漢音、ジキは呉音。名前に「あたい」がある。熟語で他に、正直、直筆や、訓読みで「直会(なおらい)」は神事、祭事後に神酒や神饌を口にする酒宴のことをいう。

「報告とご案内」

一 お詫び

本誌『うか』六七号のディスク版が読者諸兄姉に届かなかつたところのご報告をいただきました。調査致しましたところ、皆様にお届けしたディスクには、六六号が入っておりません。

ディスク版作成当時の経緯を検討致しましたところ、ディスク版発送直後に、使用していたパソコンが故障致しました。

推測の域を出ませんが、ディスク版作成時に既に、使用パソコンが故障していたと考えられます。

ご返却いただいたディスクにコピーして、再送の手続きに入っておりますので、お申し付け下さい。

二 本会が発行しております

漢点字版の定期刊行物

①朝日歌壇・俳壇… 朝日新聞に毎週掲載されております歌壇（短歌）と俳壇（俳句）を一月分まとめて、月刊で発行しております。最も短い文芸です。言



語文化の鑑賞に、漢点字文の触読の錬磨に最適です。視覚障害者が文芸に、触読を通して触れることのできる、数少ない機会の一つです。テープ版もごさいます。漢点字版の補助メディアとしてご利用下さい。

②健康記事… 朝日新聞・読売新聞掲載の健康記事から、週一回分を一月分まとめてお届けします。医療の進歩は日進月歩です。昨日の常識は今日の非常識とも言われます。最新の医療の状況と情報を、新聞メディアの目を通してお届けします。

③『横浜通信』… 本会がオリジナルに編集・発行する冊子です。原則として隔月で発行しております。

本会の活動の当初から発行を始めて、現在八三号を数えます。言葉・文字・文章に関わる記事を集めて、漢点字の触読のトレーニングに供することを目的に編集しております。随筆、詩、漢文等、ごく短めの記事の編集です。やや平易とは言えない、字句の読みの力試しになる程度の記事を選んでおります。お試し下さい。

以上、ご希望を募集しております。お問い合わせ下さい。

三 EIBファイル

本会では、漢点字の点字データファイルとして、「EIBファイル」を提案しております。このファイルは読み取り専用のファイルで、著作権法に言う「点字データ」です。従って印刷メディアの点字書と同様、著作権者の許可を得ることなく、読書を希望される方に配布することができます。

このファイルは、編集できません。著作権法の精神を遵守するためです。読むにはピンディスプレイが必要です。ソフトウェアとしては、本会が漢点字訳書を製作する時に使用しております、オリジナルの変換プログラム「EIBRKW」か、EIBファイル読み取り専用プログラム「EIBRKWR」が必要です。後者は無料で配布しております。

定期刊行物としてご紹介した漢点字書のほか、横浜並びに東京漢点字羽化の会が漢点字訳した書物、並びに本誌『うか』は、この「EIBファイル」でご提供できます。

お問い合わせ下さい。

編集後記

▼先日、羽化の会の会員ごとによいような作業を分担しているかを表にして整理してみました。最近、会員数は若干減少気味で実働会員数は26名ばかりですが、この表に載らない方が7名ほどおられます。折角この会に入会しても、何らかの作業を分担しないと、意味がありません。大部分の作業は、最終的に漢点字に変換される書物のテキストファイル入力と、他者が入力したものの校正です。その他に、この機関誌「うか」の編集・印刷・製本・発送等、漢点字とは直接関係のない仕事もあります▼更に、当会の活動状況を的確に不特定多数に向かって発信するホームページの運用があります。現在、残念ながらこれをやっていただけの方がいないので、私が臨時に担当しているのですが、お恥ずかしいことながらあまりにも他の仕事に時間をとられて、ホームページの面倒を見る余裕がありません。これではいけないと反省しきりで、何とかしたいと思っていますが、この点に関しても、どなたかご協力いただいている方がおられないかと、首を長くして捜しているところです。

(木下 和久)

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は8月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。